

農業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45169

3. 農業

浦山真帆

1. はじめに
2. 農業の概要
3. これまでの農業
4. 現在の農業
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

実習に行く前から柳田村の印象は、海に面しておらず農業の村という印象であった。その印象は調査が始まってからも変わらず、聞き取り調査をした方々のほとんどがなんらかの形で農業に関わっており、柳田村の貴重な生業であり、なくてはならない生活の中心であることがわかった。柳田村の農業をみることは、柳田村の人々の暮らしぶりをみることに直接つながっていることが感じられ、わたしは柳田村の農業に興味をもった。そこで、本章では主に戦後から現在までの農業と、農業を生業とする柳田村の人々の暮らしについて述べたいと思う。

2. 農業の概要

ここでは農業センサス（1960～2010）のデータをもとに、旧柳田村 8 地区の農業の概要を述べる。地区ごとのそれぞれのデータはあるものの、地区ごとに人口などが大きく違うため比較することが難しいことから、柳田地区全体として農業の概観を浮かび上がらせたい。

2.1 農家数

総農家数は1960年の311戸から、一度1975年には494戸に増えたもののそれ以降は年を経るごとに減少している。専業農家は1960年の45戸から1970年の4戸へと一気に減少し、それ以降は増減をしている。また第一種兼業農家¹については1960年から1970年も減少しているが、1970年から1975年にかけては101戸から5戸へ大きく減少している。それ以降は1ケタでゆるやかに増減している。さらに、第二種兼業農家²については、1960年から1975年にかけて増加し、それ以降は減少している。また、総農家に対する専業別農家数をみると1960年は、専業農家が14%、第一種兼業農家が49%、第二種兼業農家が32%だったのに対し、2010年をみると、専業農家が26%、第一種兼業農家が1%、第二種兼業農家が73%となっている。専業農家の割合は増え、第

一種兼業農家の割合は大幅に増加し、第二種兼業農家の割合は大幅に増えたことから、1960年代と今とでは、農業の様子がまるで違っていることが伺える。

表1 農家数(単位:戸)

	総農家数	専兼業別農家数		
		専業農家	第一種兼業農家	第二種兼業農家
1960	311	45	151	101
1970	262	4	101	157
1975	249	1	5	243
1980	252	7	6	239
1985	241	12	9	220
1990	229	12	3	214
販売農家	177	10	3	169
1995	217	24	8	185
販売農家	172	15	8	149
2000	212			
販売農家	159	22	4	133
2005 販売	124	19	6	99
2010 販売	110	29	1	80

(出所:農業センサス)

表2 経営耕地面積規模別農家数(単位:戸)

	0.3ha未満	0.3~0.5ha	0.5~1.0ha	1.0~2.0ha	2.0~3.0ha	3.0~5.0ha	5.0~10.0ha
1960	49	64	157	34	2	5	-
1970	32	75	136	19	0	0	
1975	45	71	123	10	0	0	
1980	41	69	120	18	1	2	
1985	39	77	100	20	3	1	1
1990							
販売農家	*	77	90	11	2	1	-
1995							
販売農家	*	82	77	10	1	2	-
2000							
販売農家	*	68	74	13	1	3	-
2005	1	51	56	14	0	3	1
販売農家	-	51	56	14	0	3	-
2010	1	47	44	14	3	2	1
販売農家	-	47	44	14	3	2	-

(出所:農業センサス)

2.2 経営耕地面積規模別農家数

経営耕地面積規模別農家数については、全体として農家数が減っていていることもあり大ま

かな変化は読み取りづらいが、1900年以降、0.3ha未満の農家がほぼ見られないところが特徴である。また、0.5～1.0haの農家が1960年から2010年の間に約3分の1になっており、減少の割合が高い。全体として大規模農家へとシフトしてきたことが読み取れる。

2.3 経営耕地面積

経営耕地面積も減少の一途をたどっている。1960年の16,632haから2010年の8,992haまで約半分になっている。田、畑は1960年から大きく面積の減少の流れをたどっているが、樹園地に関しては、1980年、1985年に大きく増加し、それ以降増減を繰り返している。また、どの年代においても田の面積の割合が大きいため、稲作が主として行われてきたことが読み取れる。さらに、畑についてみると、販売農家³の面積の割合が徐々に減少していることから、畑では販売用ではなく家庭で食べるために作物が育てられるようになってきたと推測ができる。

表3：経営耕地面積（単位：ha）

	面積計	田	畑	樹園地
1960	16,632	12,906	3,446	41
1970	15,280	13,110	2,160	1
1975	13,168	11,489	1,627	52
1980	15,859	12,035	1,628	2,196
1985	14,623	11,299	1,184	2,140
1990	12,376	10,118	1,161	1,097
販売農家	11,416	9,216	1,103	1,097
1995	11,554	9,599	1,267	688
販売農家	10,606	8,759	1,159	688
2000	11,661	9,257	1,222	1,182
販売農家	10,625	8,351	1,095	1,179
2005	10,874	6,979	1,920	1,975
販売農家	8,885	6,950	1,130	805
2010	8,992	6,654	1,540	848
販売農家	8,325	6,637	840	848

(出所：農業センサス)

2.4 農業就業人口

農業就業人口では、男性より女性の方が多い。ただ、1980年代あたりから男性の割合も増え、近年では男性も女性も同じような割合になっている。また、男女ともに高齢化が進んでおり、農業就業人口のほとんどが60歳以上のお年寄りであり、若者はほとんどいない。そのなかでも、30～39歳の世代が一番少ない。これは、10代のときは地元で暮らしているが、農業以外の仕事で社会人として働くにあたり村を出ていく人が多いからと考えられる。

表4 農業就業人口 (単位:人)

	総計	男					
		計	15~29	30~39	40~59	60~64	65~
1960	1056	479					
1970	366	88	12	6	30	16	24
1975	195	52	7	1	9	9	26
1980	190	55	3	1	10	8	33
1985	213	65	4	2	7	14	38
1990	214	74	6	0	6	11	51
販売農家	182	62	4	0	6	9	43
1995	193	74	6	1	8	7	52
販売農家	159	63	5	1	7	7	43
2000							
販売農家	192	76	7	1	5	11	52
2005 販売	146	52	2	0	3	3	44
2010 販売	145	67	4	0	4	12	47

	総計	女					
		計	15~29	30~39	40~59	60~64	65~
1960	1056	577					
1970	366	278	26	52	116	39	45
1975	195	143	8	10	70	20	35
1980	190	135	9	6	49	23	48
1985	213	148	4	4	55	25	60
1990	214	140	4	4	36	26	70
販売農家	182	120	4	2	31	23	60
1995	193	119	4	3	16	24	72
販売農家	159	96	2	2	14	23	55
2000							
販売農家	192	116	5	1	15	17	78
2005 販売	146	80	3	4	8	11	68
2010 販売	145	68	2	1	7	15	53

(出所:農業センサス)

3. これまでの農業

表3の経営耕地面積を見てもわかるように、柳田村の農業の主となってきたものは、「稲作」である。海もないこの村で、農業をする以外に大した仕事もなく稲作は貴重な主産業であり、Aさんが(野田、80代、男性)子供の頃は家族全員で手伝い、出稼ぎに出るようになっても春と秋は必ずかえってきて田んぼを手伝ったというように、村にほとんどの人が稲作に関わりながら生きてきた。稲作に焦点を当て、これまでの農業を見ていく。

3.1 稲作形態

Aさんや、Bさん（笹川、男性、67歳）によると、先にも述べたように、子供のころは親の農業を手伝うのが一般的で、子供も貴重な労働力をみなされ、家族全員で稲作を行った。子供は、小学校が午前中で終わるので、学校に行く前と帰ってきてからなど、空いた時間に手伝った。田植えや稲刈り（手で行う仕事）は女性が主で、土方や運搬作業など（力仕事）は男が主に行い、子供の仕事は、田んぼをうつ（耕す）牛に竹をつけて誘導、家畜のえさとなる浅草の収穫、はざ干し⁴の手伝い、脱穀の手伝いなどであった。縄を縫ってから学校に行くという習慣になっており、縫わないと学校に行かせてもらえなかったり、はざかけや脱穀が終わらないと寝られないということが多々あった。

3.2 稲作慣行

Bさん、Cさん（日詰脇、60代、男性）、によると、柳田村には古くから「結（ゆい）」と呼ばれる、共同作業の制度があった。苗とりや田植えなどの作業をご近所でお互いに手伝いにいったものだそう。そのことを「縁（え）をする」と言った。縁はだいたい班の単位で行われた。苗代の種まきに「土用の3番に播け」という言葉があり、4月18日から21日ごろまでにしなさいという意味で、その日までに遅れないように苗代を播いた。そうした風習は15～20年程前からだんだんと減っていった。その理由としては、便利な機械ができて人手がいなくなったことや、価値観の多様化などが挙げられていた。

3.3 肥料

Dさん（60代、男性）、Eさん（野田、70代、男性）、Fさん（野田、70代、男性）さん、Gさん（野田、80代、男性）によると、肥料は、化学肥料が普及するまでは、自給肥料を主に使用していた。これには、枯葉、人糞、家畜の糞尿、さらに鰯や鯿などが用いられた。人の家の人糞と米を交換してもらうことも多かったので、交換しやすいように家の作りも玄関の近くに便所を設置している家も多かった。人糞はそのまま使うと中にある寄生虫によって健康被害を被ることもあったので、水田に穴を掘り、その中に下肥や草を混ぜて腐熟させたものを使用していた。このような肥料は戦後も使われた。また、馬や牛を飼っている家では、馬糞牛糞を肥料に使用することもでき、家畜が飼われているところに毎日刈った草や藁を入れ、家畜がそれを踏むことで堆肥になった。その場所のことを「つぼ」と呼んでいた。さらに、柳田村は、宇出津からも離れておらず、馬車引きという人が宇出津へ石炭などを持っていき売って、その帰りに米と物々交換で鰯や鯿の漁獲量が多いときに仕入れることができ、干したり、薄く切ったりして使われたが、それらは良質な堆肥として使用された。

3.4 農具

Aさん、Hさん（百万脇、男性）、Iさん（石井、70代、女性）によると、機械が普及する以前

は、原始的な道具を用いて稲作が行われていた。例えば、苗を入れるための苗籠、田を耕すための「鋤」、土塊を砕いてならすための「柄振」、稲の植える目印をつけるための「転杵（ころがしわく）」、わらを切るため「押し切り」、お米ともみがらや未



写真 1 押し切り (H さん宅にて) 2015 年 8 月筆者撮影

熟米を選別する「唐箕（とうみ）」などである。ほとんどの農具は、必要がなくなったので壊したり、教育委員会に渡したりしたそうだが、柳田村の人に農業についてのお話をきくなかで、昔の農具を今も自宅に置いてある方にも出会った。柄振、転杵、鋤、押し切り、箕、唐箕などが置いてあった（写真参照）。唐箕は機械があるので精米に使うことはないが、豆の皮を選別するのに使うかもしれないということで残してあるそうだ。

3.5 機械化

B さん、H さん、J さん（石井、70 代、男性）によると、柳田村では、1960 年代から、次第に耕運機などの機械の導入が行われるようになってきた。まず、始めに出てきた機械が耕運機である。以前あった柳田農業高校でも取り入れられた。しかしながら、柳田村の山間部は、これまで機械を使わず行ってきたため農道が整備されておらず、まずは農道を整備しないと大きい機械を入れることが困難などの理由から機械の導入が遅れたところもあった。また、導入資金が大きな負担となり、経営規模の小さい零細農家は機械を購入することができず、比較的后まで人力に頼られ、すぐに購入できたのは大きな規模の農家だけであった。続いて、足踏み式の脱穀機が登場し、1970 年代からは自脱型の脱穀機が登場した。そして次に登場したのはバインダーである。バインダーは長い期間使用され、稲刈りだけでなく束ねたわらを家畜のえさにやれるので、とても重宝されたようだ。さらに、コンバインなど次々に新しいものが登場した。最後に 20 年前程にトラクターが登場した。

3.6 農業の衰退

『柳田村史』（1975：627-636）によると、柳田村は、稲作を中心に 1960 年代前半までは裕福な村だったが、表 1 を見てわかるように、高度経済成長のあった 1970 年代に入ると専業農家が急激に減少し、兼業農家が増加している。このころから、政府の減反政策などによって作付面積が減らされ、さらに米の値段が下がったことによって、稲作に対する依存度の高い柳田村では、その影響を大きくうけ、出稼ぎに行くしかならず、柳田村は代表的な米産村から出稼ぎ村になっていたそうだ。出稼ぎ先は、従来のような職人的なものというよりは、オリンピックや高速道路などの建設事業に関わるものが多かったという。

4. 現在の農業

『農業とは何か』（末松達郎 2004：219-234）によると、戦後日本では、農業改革が行われ、大多数の農家が自分の所有する土地をもち、農家数や農業就業人口が近代日本の100年の中でも最も多くなった時期でもある。しかし、1950年代の食料不足時代から、1960年代後半に入ると化学肥料や農業技術の発達が進み、徐々に米あまり時代へと移行いった。この時期の農村部では、都市部への人口の移動による過疎化と、農業から他産業への職業の転換による兼業化、脱農業化という二重の変化が起こった。このようなことから、農業就業人口は減少の一途をたどっている。このように、戦後日本の農業構造は大きくかわってきたことがわかる。また、日本の農村部では以前より農業に頼っているだけではない状況にも関わらず、農村では田んぼに囲まれており、経営的に利益が上がらなくても農業を行い続けるという特徴がある。このような人たちももう何年もすれば、体力的に農業が続けられなくなることは確実であるが、日本の農村に住む人々は農業を続けることに生きがいを感じている。これらは日本全体の特徴であるが、柳田村の農業も日本の農業の変化に伴って形をかえてきた。ここでは、とくに柳田村の「請け負い」と「ブルーベリー」について言及する。

4.1 請け負い

柳田村の農業について、聞き取りを続けるなかで、昔は田植えから稲刈りまで全部自分で行っていたが、今は水のお世話や草刈り、消毒などは自分ですが、田植えや稲刈りは法人に任せているという声をちらほら聞いた。Bさんによると、請け負いがみられるようになったのは、後継者不足が問題になってきた20年程前（1995年ごろ）からで、そのころから大きな法人などが目立つようになってきたという。Bさん自身は、今年から仲間と3人で「笹川中山間地機械利用組合」を作り、助成金でコンバインと耕運機を購入した。これらは、仲間同士で利用する以外にも請け負いを行っている。この組合は、行政や農業協同組合とタイアップしたものであり、機械を購入するための助成金が行政、農業協同組合からもらえるというものである。もともと仲間同士であったBさんとその仲間同士で、一昨年くらいから、この地域の人々も、子供が都会に行って戻ってこないのの後継者もおらず、田んぼをする人が皆高齢化して、楽な機械があっても個人では機械も買うことができないので、個人的に百姓を続けていくのは難しいのではないかと考えるようになり、助成金をもらうために、JAや行政と協力しつつ半年ほどかけて組合を作ったそうだ。現在では、請け負いの分も合わせると全部で7町歩（約7ha）ほどを耕している。この組合は大きなものではない。しかし、大きな法人に委託すると、お米をもらうことはできるが、誰が誰の米だかわからなくなってしまい、せっかくお世話した田んぼだが自分の田んぼから採れたものを食べることができない。その点、このような地区ごとの組合は自分でお世話した田んぼのお米をもらえるようにしているので、委託する側としても嬉しいそうだ。また、Bさんの組合は、請け負

いといっても、契約というよりは同じ地区の人同士の顔なじみの間柄で、頼まれてやっている状態に近いという。

4.2 ブルーベリー

ブルーベリーは、能登町に「星空とブルーベリーの里」というキャッチコピーが掲げられているように、今では能登町を代表する特産品となっている。柳田村の各お宅に伺った際も、お皿に山盛りのブルーベリーが当たり前のように出されたことが印象的であった。柳田村は、能登半島にありながら海に面していない中山間地、さらには過疎化が急激に進んでいたこともあり、柳田村は早くからブルーベリーに注目していたようだ。Hさんによると、30年程前からJさんが筑波大学から持ち帰った苗で石川県で初めてブルーベリーの栽培を始めた。本格的にブルーベリーの採集が始まったのは20年程前（1995年ごろ）からである。柳田村では約90件が、ブルーベリー栽培に関わっている。その中で、Kさん、Lさんの事例を紹介する。

Kさん（重年、男性、66歳）

日本ブルーベリー協会の理事長を務める。現在、ブルーベリーを100本程栽培しており、ブルーベリーの栽培は、柳田村農業振興作物であったために、モデル農業の一環として1989年に始めた。ブルーベリーには大きく分けて野生のワイルドブルーベリー、ハイブッシュブルーベリー、ラビットアイブルーベリーの3種があり、Kさんハイブッシュブルーベリーは寒い地域に適したブルーベリーであるが水に弱いので、元々水田に植えていたが、水田だろ3年程で枯れてしまった。それを改善するために1996年に渡米し、そこでヒントを得てチップ栽培を考案した。腐りにくいリウニンという有機物を含む針葉樹のチップを用いる方法であり、10～15年は同じチップを使い続けることができる。Kさんは、北陸で唯一のブルーベリー栽培士として、このチップ栽培のノウハウを他の農家へ普及している。また、Kさんは2011年3月までは兼業農家で、産業開発モデル農場長も務めていた（2005年の合併により、モデル農場は2006年に「ふれあい公社」という名前に、さらに、2011年に「能登ブルーベリー普及センター」へ名前が変更された）。公社産業開発モデル農場では、果樹や野菜を試験栽培しており、現在ワイルドブルーベリー、ハイブッシュブルーベリーラビットアイブルーベリーの3種をかけあわせて作った20種のブルーベリーを試験中である。試験は木が成長するまでの4、5年と、結果がでるまでの4、5年の合わせて10年ほどかかる。この試験結果がよければ新しい品種を農家に進める予定だそうだ。

また、ブルーベリーは手摘みでの収穫が大変なので、1人が栽培できるのは100～150本である。1人1人の栽培面積の平均は約80aである。柳田村では約90軒の農家がブルーベリー栽培を行っており、その中で最大の農家は30aで600本のブルーベリーを栽培している。企業としては1.3haで1500本のブルーベリーを栽培している柳田食産が最大である。柳田食産

では能登町中のブルーベリーが集まり加工されている。

Lさん（野田、男性、69歳）

Lさんは、上で述べた「柳田食産株式会社」の代表を務めておられる。柳田食産は、柳田村で採れたブルーベリーをワイン、ジャム、ゼリーなどに加工、販売している会社で、ワイナリーの見学などもできる。ブルーベリーワインは、九州の焼酎屋に委託してブルーベリーワインを開発した。ブルーベリーは作れてもワインの製造の知識を持つ人が柳田にはいなかったため、委託の形をとった。

柳田村では、年間約15トンのブルーベリーが採れるが、全て無農薬である。天候などによって取れ高は毎年大きく変化するため一定の出荷をすることが難しい。ブルーベリーはハウス栽培をしておらず、大規模農家もいない。ほとんどが20~30aくらいの小さな規模で栽培している。柳田食産にブルーベリーを出荷している多くの農家が定年後の老人であるそうだ。

5. 考察

以上、柳田村の農業の移り変わりである。上にも述べたように、柳田村では、戦後農業は個人で行うのではなく、家族ぐるみ地域ぐるみで営まれ、肥料や農具も原始的なものを使って行われてきた。現在では、機械化や価値観の多様化が進み、時代の流れにもなっており、柳田村の生業であった農業も衰退の傾向にある。しかし、お話を聞く中で村の実態を理解し、前向きな姿勢の声も聞くことができた。請け負いを行っているBさん（笹川、男性、67歳）は、「できる限り田んぼを続けていけるように地域で協力していかなければいけない」とおっしゃっていたが、このような考えは、かつて行われていた「結」にみられるような、家族で地域で助け合っていくのが当たり前の精神のようなものからくるのではないかと思う。柳田村は、かつて農業に村のほとんどの人がなんらかの形で関わり、農業に関わり合いながら暮らしてきたからこそ、農業における精神や暮らしぶりが、そのまま柳田村の精神や暮らしぶりになっているのではないか。村の今後さらに請け負いの重要性は増してくると予想されるが、このような精神を活かして家族ぐるみ地域ぐるみで柳田の農業を守ってほしい。それが、4.1で述べたように、農業を続けること自体が生きがいとなるのだろう。さらに、農業の衰退は、たくさんの地域で問題になっているが、柳田村では早くから“ブルーベリー”に着目していたという特徴がある。このような強みをもつ柳田村の農業の今後に期待できると思う。

6. おわりに

今回の調査実習では、柳田村の方々の素朴な人柄と温かさを大いに感じる事ができた。よそ

者であるわたしたちが、いきなり柳田村にお邪魔して、話をきちんと聞かせてもらえるのだろうかと緊張していたが、優しく迎え入れてくださったので、自分自身としても楽しんで調査を終えることができた。聞き取りに伺ったお宅では、しまっており古く農具を持ってきていただいたり、納屋を見せていただいたりと調査に協力的でみなさんのおかげで、充実した調査実習になった。最後に、お忙しい中調査に協力してくださった柳田村のみなさんに心からの感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

注

¹ 第一種兼業農家とは、農業所得を主とする兼業農家のこと

² 第二種兼業農家とは、農業所得を従とする兼業農家のこと

³ 販売農家とは耕地面積が 30 a 以上または農産物販売金額が 50 万以上の農家を指す。

⁴刈り取った稲の束を「はざ木」という棚にかけ、天日干しする伝統的な乾燥技術